

TOPICS  
1

●第10回セーフティジャパンインストラクター競技大会

# 世界トップクラスのインストラクターが 指導力と安全運転の技術を競う



今大会は、海外11カ国29名の選手を含む、総勢114名が参加した

9月8日～9日の2日間、鈴鹿サーキット交通教育センターで、「第10回セーフティジャパンインストラクター競技大会」が開催された。この大会は安全運転普及の各分野で活躍するHondaの安全運転インストラクターの指導力ならびに運転技術の向上と均質化を図る機会の提供を通じ、世界トップクラスのインストラクターづくりをすることを目的に1997年より毎年開催され、今年で10回目を迎えた。

選手は、グループA(国内各交通教育センター)、グループB(Honda各製作所、研究所、ホンダ学園、ホンダエンジニアリング)、グループC(ホンダモーターサイクルジャパン、二輪販売店、ホンダ学園)、グループD(四輪販売会社、ホンダ学園)、グループE(海外連結子会社・関連会社・ディストリビューター)に分かれて技を競った。

今年、国内から85名、海外からはオーストラリア、中国、フランス、フィリピン、インドネシア、韓国、マレーシア、ロシア、シンガポール、タイ、トルコの計11カ国から29名、総勢114名が参加した。

## 指導者に必要な研鑽を積む

大会前日(7日)には、午後2時よりグループAの選手を対象とした「指導力審査」が行われた(下記コラム参照)。

グループA～Eまでのすべての選手による競技大会は、9月8日から開催された。

午前8時30分から行われた開会式では、大会会長である吉見幹雄・本田技研工業(株)専務取締役・安全運転普及本部本部長が挨拶。「本大会も1997年の開催以来、今年で10回目という節目の年を迎えました。選手の皆様も、このような機会を通じて、技術的にも精神的にもさらなる研鑽を積んでいた、より豊かなモビリティ社会の実現という大きな夢に向けてチャレンジを続けるようにお願いいたします」と述べた。続いて出場選手を代表し、昨年のグループA総合部門(事業所)で1位となった鈴鹿サーキット交通教育センターの出原大輔選手が、節目の大会に参加するにあたり、インストラクターとして相応しい安全運転をする事と、安全運転普及活動の意義を再認識し、広く地域社会に安全運転の心と技を伝えていくことを力強く宣誓した。



開会式で挨拶を行う吉見幹雄・本田技研工業(株)専務取締役・安全運転普及本部本部長

午前9時30分より、二輪部門は「ブレーキング」「パイロンスラローム」「コーススラローム」、四輪部門は、「縦列駐車・車庫入れ」「フィギア※」「ブレーキング回避」「パイロンスラローム」の競技が行われた。

※フィギア=スムーズな操作・走行かつ正確な車両誘導技術を競う種目。縦7m×横7mのボックス内に設けられた3ヵ所の枠内に方向転換をしながら指定された前輪または後輪を入れ、タイムを競う

大会1日目の最後には、大会前日の「指導力審査」で1位となった鈴鹿サーキット交通教育センターのインストラクター3名による、「店頭活動における四輪車の死角」の説明が実

演され、参加者の高い関心を集めた。また1日目の夜には懇親会が開かれ、選手同士が交流を深めた。懇親会では、ビデオレターを通して、福井威夫・本田技研工業(株)社長が「本大会も今年で10回目を迎えます。Hondaとしても存在を期待される企業をめざして、信頼される安全運転普及活動を皆様とともに展開していきたい」と、選手たちを激励した。



「店頭活動における四輪車の死角の説明」のデモンストレーション

の説明」のデモンストレーションが行われた。死角の確認方法や、死角を意識した運転についての説明が実演され、参加者の高い関心を集めた。

## 信頼される安全運転普及活動を

大会2日目は午前8時より二輪部門「一本橋」、四輪部門「コーススラローム」。最終種目は、グループAの選手による「トライアル」。二輪車の特性を活かし、災害復旧活動の場面で遭遇する道路の難所を想定したコースで競った。

午後1時30分より、表彰式と閉会式が行われた。運営委員長の河野光彦・本田技研工業(株)安全運転普及本部事務局長が「今大会は第10回という節目の大会となり、各グループの選手の皆様から安全運転の普及への熱い思いを感じました。これからも、現状に安心することなく、常に高い頂点をめざして研鑽を積んでいただきたい」と挨拶し、2日間の大会を締めくくった。



二輪部門「ブレーキング」



二輪部門「コーススラローム」



二輪部門「パイロンスラローム」



二輪部門「一本橋」



二輪部門「トライアル」



四輪部門「フィギア」



四輪部門「縦列駐車・車庫入れ」



四輪部門「ブレーキング回避」



四輪部門「パイロンスラローム」



四輪部門「コーススラローム」

## 指導力審査

### 今回のテーマ:店頭活動における四輪車の死角の説明

今年の指導力審査のテーマは、「店頭活動における四輪車の死角の説明」。四輪販売会社店頭で四輪車の死角についてのアドバイスを販売スタッフの立場に立って説明するという設定で、7つの交通教育センターのインストラクター3名1組が規定の15分間で、指導方法を競った。発表された事例の一部を紹介する。

#### ★交通教育センターレインボー和光

死角となる場所について、わかりやすく「ミラーで見えない死角」「前方の死角」「後方の死角」「ピラー(クルマの屋根を支える柱)の死角」の4つに分けて説明。パイロンを使用してクルマの前後の死角を確認した。さらに、正しい運転姿勢をとることが死



角を減らすことにもつながることを伝えた。

#### ★交通教育センターレインボー浜名湖

お客様役が運転席に座り、実際にどこが死角となっているのかロープを使って確認していった。確認が進むと、クルマの周りを取り囲む様にロープが輪となり、死角部分が一目でわかるように示された。そして、死角を意識してミラーで確認、歩いて確認、身体を動かして目視で確認するなど、安全確認を意識することの大切さについて説明した。

#### ★鈴鹿サーキット交通教育センター

まず、運転席から死角となる範囲をロープで明示。ドライバーが体を動か

して目視で確認できる範囲のロープをはずし、死角を減らすことが出来ることを説明した。乗車前にはクルマを一周して確認することや、左折時には巻き込み事故を起こさないように、自分の目で安全を確認することの大切さを伝えた。



最後に、審判長である新家哲男・鈴鹿サーキット交通教育センター教育課長から「今年は、四輪販売会社のスタッフになりきって指導していただきました。説明の中に、来店するお客様の興味のある新しいクルマの安全機構を取り入れたり、日常の運転に役立つことをもっと取り入れてほしい」と全体の講評を述べた。